特集「学びのネットワーク」によせて

小野沢　透

本特集号は、二〇一七年四月十五日に開催した史学研究会例会をもとにしている。二〇一六年は、本誌『史林』の刊行開始からちょうど一世紀の節目に当たり、同年十一月の大会を『史林』第一〇〇巻刊行記念シンポジウムとして開催したことは、周知のことであろう。一七年四月の例会も、派手に打ち上げたわけではなかったものの、第一〇〇巻刊行記念行事の一環として開催した。「学びのネットワーク」という例会および本特集号のテーマにも、そのような意図が込められている。つまり、史学研究会や『史林』のような、知識・学術・文化等を巡る個人・組織・制度等の様々な連関を、史学研究会に集う様々な専門領域から考えてみよう、というのが、このテーマに主催者が込めた意図である。

とはいえ、読者の中には、「学びのネットワーク」というテーマに違和感を覚えられる向きもあるかもしれない。本誌は、第九〇巻以来、第一号で特定のテーマに沿った特集を組んでいるが、これまでのテーマは、「海」「家族」「祈り」など、修飾や限定を付さぬ名詞単独で提示されてきたからである。テーマを検討した常務理事会では、いろいろな議論があった。たとえば、「学会」や「学術誌」という案も検討したが、それでは近代的な限定が強すぎる。それとは逆に、「学び」や「知識」では、あまりに漠然としていて、例会や特集号の凝集力が失われてしまうだろう。このような議論を経て、いささか据わりの悪さがあることは承知の上で、「学びのネットワーク」というテーマに落ち着いたのである。

例会の報告者であった、西村、磯貝、高木、喜多、水野各氏、そして本特集号への寄稿をお願いした、田中、苅谷、平田各氏には、「学びのネットワーク」というテーマが本誌の第一〇〇巻刊行記念という意図を込めたものであることを、あらかじめお伝えしている。しかし、それ以外の点では、例年と同様、報告や論説のトピックやアプローチの選択等につ

いて、主催者側から何ら条件や要望は提示しなかった。その方が、本特集号の内容が豊かになり、思いがけぬ発見に出会える可能性も高まると期待したからである。そしてその期待通り、本特集では、時代・地域・性格の異なる多様な「学びのネットワーク」の姿が浮かび上がることとなった。以下では、まず八本の特集論文を、筆者なりに出来るだけ相互に関連付けて紹介していくこととする。

冒頭の西村論文は、後期ローマ帝国における教養文化と帝国の支配構造の関係を検討する。修辞学に代表される教養は、官僚化が進む後期ローマ帝国において若者の出世の経路となると同時に、それを共有する知識層を通じて帝国に凝集力を付与し、かかる教養によって組み立てられた言説は、帝国とその支配者を過去の栄光と理念的に結びつけることを通じて帝国支配を正当化するイデオロギーとして機能した。しかし、権力と密接に結びついたがゆえに、後期ローマ帝国における教養が、帝国の衰退を食い止めようとする発想を生み出すことはなかった。

「学びのネットワーク」と社会集団が相互に補強しあうという点で、西村論文が描き出すネットワークは、磯貝論文が詳細に描き出す、ヴォルガ・ウラル地方のウラマーの遊学や学統のネットワークと重なり合うところがある。同地域内のウラマーたちは、師弟・学友関係のネットワークで結びつき、さらにそれが姻戚・親戚関係によって補強されることで、結果的に身分集団に近い社会層を形成し、地方名士層の一翼を占めることとなったのである。

西村・磯貝論文が、知識と人間のネットワークの共時的な重層関係を描き出しているとするならば、苅谷・高木論文は、通時的な知識のネットワークに着目する点で共通する。苅谷論文は、十七世紀に西アフリカで活躍したイスラーム法学者アフマド・バーバーによる、奴隷化の可否を巡る法学的見解の知的系譜を追う。バーバーは、奴隷となしうるのは非ムスリムのみであるとする、イスラーム法における属人的な規範を形式的に維持しつつ、特定の地域や民族集団の出身者を奴隷化することを容認する属地的原理に基づく法学的見解を提示した。このようなバーバーの見解は、十四～十五世紀に活躍したイブン・ハルドゥーンをはじめとする、イベリア半島から西アジアに至るサハラ以北のイスラーム世界で生み出さ

れていた知識や情報に大きく依拠する内容を有したが、社会的に見れば、奴隷の産地であった西アフリカ地域において効率的に奴隷化の可否を判断するという要請に応えるものであったと理解できるという。

時空を超えた「学びのネットワーク」が、その末端において眼前の社会的要請に奉仕する姿は、明治・大正期の文人画家として知られる富岡鉄斎の国史顕彰活動を分析する高木論文にも現れる。煎茶と古物に代表される近世の文人文化や中国の文人画の伝統を継承した鉄斎は、君臣道徳に基づく「名教的」歴史観に立ちつつ、明治政府に先行して尊王的国史の顕彰運動を展開し、政治家や地方名士とのネットワークを通じて南朝史蹟の顕彰や嵯峨の寺院復興などに関与した。そして、鉄斎の「名教的」歴史観は、宮内省が治定した陵墓や史蹟を無条件に受け入れる姿勢、および口碑流伝の採取に基づく国学者的な調査方法にも通底するものであった。鉄斎の知識の体系を「学びのネットワーク」と捉えるならば、前近代の「学びのネットワーク」が近代国家のナショナリズムを下支えする構造が存在していたことになる。

高木論文は、ネットワークにおける個人の役割を考察するという観点から読んでも興味深いが、このような観点がいっそう顕著なのは、明治期に活躍した人類学者・考古学者の坪井正五郎を結節点として展開した華族の考古学研究の実態を検討する平田論文である。華族たちは、坪井との接触を通じて人類学や考古学に接し、みずから研究に携わるのみならず、遺物や資料の収集や経済的支援を通じて、これらの近代的学問分野の発展に貢献した。一方で、これら華族たちは、同じ組織や学会に属していながらも、爵位という政治的な原理によって分断されており、坪井の死後は考古学研究から離れていく。華族の考古学研究の「学びのネットワーク」は、坪井という個人に大きく依存し、それゆえに坪井という結節点の喪失によってネットワーク自体も失われていったのである。

以上の諸論文がひとつのネットワークに注目するのに対して、田中・水野論文は、複数のネットワークを比較する観点を導入する。田中論文は、南宋から元の時代の朱子学と陸学の相克を、それぞれの学統の継承者と受容者の双方に着目して検討する。朱子は門人に四書を熟読してそれを自らの実践を通じて体得することを求めたが、その著作の難解さゆえに、

朱子学の主たる受容者たる下層士人は朱子の意に反するような安直な解説書を求め、学統の継承者たちは朱子学の普及拡大のためにそのような解説書を積極的に出版するメディア戦略を採用した。一方の陸学派は、祖である陸象山に、論理的分析や言葉をもって自らの思想を普及させようとする、朱子学派と同様の側面が存したにもかかわらず、学統の独自性を際立たせるために、意図的に書物の出版を抑え、象山の言語不要論を強調するメディア戦略を採用した。社会的には、より読者の需要に即した戦略を採用した朱子学派が多数派を形成することとなるが、何れの学統も自らの開祖の意図に必ずしも沿わぬメディア戦略によって自派の振興を図った点では同断であった。

水野論文は、現代の産業集積と「学びのネットワーク」の関係を論ずる。産業集積地においては、特化が進みすぎることで、固定化・硬直化を意味する「ロックイン」という現象が生じ、やがて産業の衰退に至ることが多い。これを回避して新たな産業の分岐を発生させるためには、制度的・組織的・社会的な近接性を有するネットワークを通じての知識学習が有効である。ただし、この近接性は、近すぎても遠すぎても有効に機能しない。遠すぎればコミュニケーションが不可能であるし、近すぎれば新奇性が無いからである。したがって、「適度」な近接性を有する学習のネットワークを流動的に組み替えていくことにより、意図的に「ロックイン」を回避することを期待できるという。競合・対立しあう「学びのネットワーク」の優勝劣敗には多様な要因がからむのが常であると考えられるが、水野・田中論文は、主体としてのネットワークが採用する戦略が、その消長に大きく関わっていることを具体的に明らかにした点で共通する。

水野論文と同様に現代の「学びのネットワーク」を検討する喜多論文は、一九八〇年代に米国で結成された「社会的責任を考えるコンピュータ専門家の会（ＣＰＳＲ）」の活動を分析する。ＣＰＳＲは、米レーガン政権が推進した戦略防衛構想などの政治的問題について、組織として特定の立場を取ることなく、科学者間で様々な問題について議論を深めることと、専門家の正確な情報を一般に提供することを、活動の中心に据えた。そして、ＣＰＳＲの結成および活動の重要な背景のひとつには、軍事研究と科学研究の関係への問題意識、さらには個々の研究者が研究費や研究環境を如何にして獲得

するのかという問題が存在したという。

喜多論文が描き出す「学びのネットワーク」が直面した諸問題は、まさに今日の私たちが直面している問題に直結している。しかしながら、現代の諸問題にも当てはまる普遍的な問いを発しているのは喜多論文ばかりではない。たとえば、知識と権力が密接に結合した「学びのネットワーク」が同時代の根本的な問題に対して盲目になりうるとの西村論文の指摘には、普遍的な真実が含まれているように思われる。田中・苅谷・高木論文は、「学びのネットワーク」を通じての、いわば時空を超えた知識の二次利用が、オリジナルの知識を如何に改変していくか、そしてそのような改変が如何に社会的要請によって規定されるかを、教えてくれる。平田論文から浮かび上がる、個人に依存するネットワークの脆弱性もまた、ある種の普遍性を含んでいよう。水野論文が検討する「ロックイン」という現象は、如何なる個人や組織にも起こりうることのように思われる。そして、特集論文全編を通読して筆者が感じたことは、例会の閉会の辞で小山哲氏が述べた感想と全く同じであった。つまり、「学びのネットワーク」は社会から切り離されて存在するものではなく、それが存在する社会あるいは時代のありかたと否応なく密接な関係を有してきたということである。

それでは、私たちの史学研究会はどうか。史学研究会もまた、一九〇八年の創設時から大きく様変わりしてきたことは言うまでもないが、そこには「学びのネットワーク」が社会の影響を受けつつ変容していかざるを得ないという事情が垣間見える。

一九〇八年二月一六日に開催された史学研究会の第一回例会における講演の中で、本会評議員・京都帝国大学文科大学史学科教授の内田銀蔵は、本会のあり方や方途について「希望」を述べている。（以下の引用は、『史學研究會講演集』第一冊、冨山房（一九〇八年十一月）より。旧字体は新字体にあらためた。）曰く、学会の意義は、「各自或特殊なる方面の研究に従事しながらも、常に他人の研究に注意を怠らずして、……固陋に陥るを防ぎ、他人の研究より多大の裨益を受くるの機会」を提供すること、より具体的には、「見聞狭きが為に、自己の特に研究せる問題が、他の歴史上の問題と如何なる関係に立ち、

人間全体の歴史、若しくは国民発達の経歴の上に於て、如何なる位置を占むるかを、明に認識する能は」ざるような事態を克服することにある。それゆえ史学研究会は、「史学上、重要にして、且、興味の存する問題」について、時代や地域を限定することなく研究対象とすること、史学のみならず地理学や考古学なども含めて「或一方に偏せず、種々なる方面に就いて研究せんこと」が望ましい。内田は、「古書学」や「古文書学」をも史学研究会がカヴァーすべきディシプリンに含め、取り組むべき研究テーマとして「歴史哲学」も挙げているが、これらは現在の史学研究会の主たる研究対象からは外れている。しかし、それ以外の点については、史学研究会は、ほぼ内田の「希望」どおりの方向に発展してきたと言ってよいのではあるまいか。

一方で内田は、会の規模や組織の拡大には慎重な姿勢を示していた。会を設立することや、会を「一時、盛ならしむる」こと、さらには「会をして単に多くの会員を有するに至らしむること」は、「比較的容易」であろう。しかし、会を「永続せしめ、常に、生命あるもの、活気あるものたらしめ、且、時を経るに従ひ、其基礎を益々強固にし、其事業を、益々発展せしむる」ことは容易ではない。それゆえ史学研究会は、「会員の熱心薄くなりて、沈滞振はざるに至」ることを避けるべく、「真の熱心家を以て、組織せん」との「勉めて慎重の態度」のもとに発足したという。論理的に考えれば、ここに見られるような、ある種の少数精鋭主義と、前段に見たような、出来るだけ多くのディシプリンを包含し幅広い知見を求めようとする指向との間には葛藤があったに違いない。おそらく本会の創立者たちは、後者が将来実現されることを期待しつつ、当面は前者を優先したのであろう。

発足時に会員数六三名に過ぎなかった史学研究会は、何れかの段階で少数精鋭主義を放棄し、大規模化を是とする路線を採用したようである。その経緯を仔細に分析する材料を筆者は持たぬが、事務局に残されている断片的な記録によると、会員数は、昭和三〇年代前半に千名を超え、五〇年代には千五百名近くに達した。現在の会員数がおよそ千名に減少していることに鑑みれば、昭和後半期の本会は大いに盛況であったというべきであろう。しかしそれにもかかわらず、この時

期の記録からは、『史林』の出版費用を捻出するために、会費収入を確保するのに苦慮していた様子も窺われる。そして二一世紀に入り、本会の理事会・評議員会などの場で、会員の減少傾向に歯止めをかけねばならぬとの危機感が表明されるようになって久しい。大規模化に伴って、財務や会員数など、組織の存続のための新たな問題が浮上したと言ってよいであろう。とはいえ、このような点での本会の変質を過度に強調することは、いささか的外れのように感じられる。うがった見方であることを承知で言えば、会費収入の確保や会員数の増大が「比較的容易」ではないことを実感し、それらの問題に頭を悩ませてきたのは、――おそらく幸いなことに――会の運営や事務に携わる、全体から見れば一部の会員に限られていたのではないかと想像されるからである。

むしろ、上記のような数字に表れぬところに、本会の性格の、少なくとも潜在的に重大な変化が生じているように思われる。端的に言えば、現在の本会は、内田が危惧した「生命」や「活気」の喪失という危険を内包しているのではなかろうか。いまや、本会会員の多くにとって、本会は所属する複数の学会のひとつに過ぎない。そして、とりわけ若手会員にとっては、本会の最大の価値は「査読つき」の業績を発表する『史林』という媒体を有している点にあるというのが偽らざる現実であろう。責任を外部に転嫁するつもりはないが、このような変化の少なからぬ部分が、史学研究会を取り巻く社会の変化に淵源を有することは間違いなかろう。本会の会員数の消長に、高等教育の拡充や大衆化、さらには人口や経済成長の動態が関係していたことは明らかであろう。多くの会員が本会以外の学会にも所属するようになった最大の理由は、学会や専門分野の細分化というアカデミックな背景に求められるであろうが、それ以外に、業績数という「数値」が異様なまでに重視されるようになった社会的変化も関係しているように思われる。何でも数値化してランク付けすることを「評価の文化」などと称して万能視する昨今の風潮の危うさを批判し始めればきりがないが、「学びのネットワーク」が社会から切り離されて存在し得ないとするならば、史学研究会もまた、社会的風潮に批判的な視座を持しつつも、そのような社会の中でみずからの方途を探っていかねばならないだろう。しかし、社会の変化に翻弄されて、本会が「生命」

や「活気」を失ってしまうとすれば、泉下の内田も心穏やかではあるまい。

史学研究会は、「生命」や「活気」の源泉を何処に見出していくべきか。言い換えるなら、次の一世紀に本会は如何なる「学びのネットワーク」たることを目指すのか。筆者に妙案はないが、このことを考えるためには、やはり『史林』の価値をあらためて確認することが出発点となるように思われる。先述のように、本会会員の多くは、それぞれの専門とする国や地域、時代、サブディシプリンなどの学会にも所属し、それらの学会誌を通じて、より狭い専門分野の最先端の学説や研究潮流などを吸収する機会が多いのではなかろうか。しかし一方で、学会によっては、特定の研究潮流や立場への感応度が高すぎる、あるいは学会誌の制限字数が実証的な議論を十分に展開するには少なすぎる、ということもあるだろう。これに対して『史林』は、すべての専門分野の最新の研究動向をカヴァーすることは出来ぬかわりに、流行や立場にとらわれることなく、行論と実証のみを評価基準として掲載原稿を決定する伝統を確立してきた。歴代の編集委員会による慎重な査読作業は、そのような『史林』の性格を担保するために受け継がれてきたのであり、『史林』に掲載された論考が昨今の「評価の文化」において高い数値を与えられている（らしき）ことは、付随的な結果に過ぎない。行論と実証に優れる論考のみを掲載するという『史林』の編集方針を、現時点における史学研究会の「生命」と位置づけることには、多くの会員の賛同も得られるのではあるまいか。

無論、このように述べることは、将来の史学研究会が新たな「生命」や「活気」の源泉を追求していくことを妨げるものではない。しかし、多くの会員にとっては当たり前のことであるに違いない、『史林』の性格と史学研究会にとっての重要性をあらためて文字にして確認しておくことは、「時を経るに従ひ、其基礎を益々強固にし、其事業を、益々発展せしむる」ことを望んだ内田の意志にも沿うのではないか。そのように願いつつ、筆を擱く。

（本会常務理事）